

垢索以絞上餘泥更爪髮根數搔取癢客叫快遂向頂上潑水少許捏巾拭之客又叫快乃令客更自澡髮間爽涼清剃生光初櫛至此剃出主之客遂以頭託親方手親方更操刀虛剃撫以示丁寧始施香膏密篋復篋又用疏篋總會衆髮括以假綸カクユテ又膏又櫛終用掠頭緊括作鬢向前屈之還挽寸許出之於後謂之麻結マゲ麻結有數種曰銀杏イナグ曰子麻結コマゲ曰丸麻結マダマゲ曰知餘伴麻結チヨドマダマゲ曰本田ホンダ曰他發年タハチ曰比加越ヒカカヘ曰若追志シ二十八錢從客好雖貴客加以四錢而已無如混堂收五節錢外菖蒲忍冬桃湯等別爲貪錢工風者獨年頭剃客皆投賀錢謂之初剃自雖貧者投一二緡居士頭在二緡列至豪客擲數銀中聞篋舖今在額內者九百六十四戶中分社四十八額外者無慮餘二千則通內外其數凡三千戶舖以業繁殿最爲差其值率自二三百金階上一千金云且每舖別遣一二人追戶售業謂之循篋下

〔皇都午睡三編上〕江戸前髮結床は別に安いと云は叮嚀なり首筋耳の穴まで細き剃刀にて自在に剃るなり毛剃叮嚀にして渡す床主又剃刀にて清剃してすくこと凡四五返にて垢もふけもなき迄すきそれより油上方付也を附て又すき然ふして結ふなれば上方の存在なる髮月代とは雲泥の相違なりあはれ上方もこふありたきものなりかし

〔奴師勞之〕木曾道中の髮結床の障子にゑるは千年髮は萬年と書しもをかし〔俗耳鼓吹〕現金かけねなしのかけ賣不仕候のといへるはき、たれど、髮結床の定書ほどをかし

きはなし懸職一切不仕候又青山の菓子屋の見世に居喰不仕候もをかし

〔塵塚談下〕此二十年來寛政女髮結といふ者出來たり遊女は此女にのみ結することのよし此已前より女髮結ありしことにや予小川道此比は江戸町々其日暮しの婦女迄も結する事に成けり油元結等は此方より出し一度の結賃百文づなり昔より相應に暮す者の婦女は毎朝髮結粉飾する事にて今以かはらず右髮結に委ぬる者は持髮とて五六日に一度結よし上方筋は一ヶ月に壹兩度も結ふよし度々結ふものをばふたしなみと笑ふことなりとかやされ